

空



2010・8

**SORA** 32号

# 秘 仏

柴 田 佐知子

子が草を詰め込みすぎし螢籠

黒南風や秘仏は更に布巻かれ

形代に山雨一滴轟けり

極楽の色を放てる道をしへ

太陽が真上に来る袋角

自由かと蟬の抜け殻より問はる

正論は袋叩きにされビール

—「俳句ウエップ」57より—

形代の振袖に色なかりけり

蟻たちは蟻の地響き立てて進む

海底へ熔岩原つづく日の盛り

三伏や灰をふりまく桜島

熱帯魚鬩ふ背鰭尖らしぬ

—「俳句研究」夏号より—

剥がれたる筍の皮うごめける

砂山の芯まで濡れて半夏生

白墨を打ちつけて書く夏期講座

祭馬地団駄踏んでゐたりけり

竜宮へ姫の手招き箱眼鏡

三伏の足張つて亀首伸ばす

単純な色にひらきし水中花

香水のぶつかり合へる夜の宴

足の先地獄に入れて涼みけり

## 麦の秋

高倉恵美子

農機具の音の大きく夏に入る

牛馬居し頃の小川や麦の秋

青嵐車椅子でも頑固です

今年また裾を詰めぬる更衣

順番を決めて田水を張つてをり

サングラスかけて田植の男かな

嘘つきで断る電話梅雨長し

桜の実鳥に盗られてしまひけり

## 夕河鹿

中条さゆり

物言ひを龍馬に真似て初鯉

観音の落し文かも拾ひけり

葉桜や寄進瓦を高く積み

その中の一人はチェロをみどりの夜

時の日の掌よりこぼるる陀羅尼助

夕河鹿三連竈湯気立てて

麦を焼く煙の中を人走り

畦焼きの夕日の中を帰りけり

## 螢狩

樋口みのぶ

## 夏薊

堀江恵子

宿下駄で覗く古井戸蛙鳴く

能勢浄瑠璃幼きふしや夕螢

人形のとび出す絵本夏立てり

浄瑠璃を息つめてきく子供の日

寄書きの病む子にとどく薄暑かな

浄瑠璃のむせび語りや合歓の花

夏蝶やふゆるにまかす庭の草

裾乱し乱さず木偶の跣かな

奇兵隊の墓石並ぶ木下闇

郵便局に並んで村の夏芝居

船頭のこゑのみ聞こえ螢待つ

蜘蛛の囀の吹かれてをりぬ浮御堂

杉山の闇の切り立つ螢狩

一枚に曼陀羅の風苗襖

万緑や一枚岩の顕彰碑

山姥の通ひし道や夏薊

## 神の橋

安武晨子

## 敷島

大地真理

青葉影水棹をゆるくどんこ舟

母縫ひし解くには惜しき麻衣

栄螺鳴く假の店張る能古渡し

海の面を引きずつて鶉の翔び立てり

すぐ終るひとりの水仕西日濃し

むつごろうの高さを競ふ有明海

梅雨寒しものいふ自動販売機

別荘のあじろ天井おけらたく

百段の磴百段の夏落葉

古民家の三和土漆黒つゆ深し

「心太あります」阿蘇をまなかひに

夏の浜あくまで白し耶蘇の墓

著義の花四五歩で尽きる神の橋

六月や敷島に水溢れをり

辻に古る子安地藏の草を刈る

紅型の端切を買ひぬ菖蒲見て

空作品抄

柴田佐知子抽出

目を凝らす網戸の外の世の中に

福岡

高倉 和子

下駄履きしばかりの足に祭笛

東京

中田みなみ

われは母かをんなか妻か鯛雲

長崎

荒井千佐代

梅を干す褌のごとく人を断ち

埼玉

服部 早苗

夕立のその上にある棚田かな

糸島

小林 朱夏

父さんのおどろぐ箱や麦の秋

須恵

苑 実耶

狐の提燈十三仏の膝の丈

福岡

柴田志津子

めまとひの子の高さにも上下して

粕屋

秋 千 晴

戦乱に寵妃ありけり合歡の花

福岡

あさなが捷

沈鐘の音混じりたる夏怒濤

福岡

矢野百合子

浮いてこいリストラされても浮いてこい

福岡

吉村 摂護

梅檀は曖昧な花日本語も

長崎

鳳 蛮華

青嵐車椅子でも頑固です

うきは

高倉恵美子



麦を焼く煙の中を人走り

福岡

中条さゆり

杉山の闇の切り立つ螢狩

福岡

樋口みのぶ

すぐ終るひとりの水仕西日濃し

行橋

安武晨子

紅型の端切を買ひぬ菖蒲見て

福岡

大地真理

螢かご覗く異界を見るごとく

羽曳野

織田高暢

人許す心の欲しやアマリリス

糸田

宮井知英

空蟬をそつとはづしてやりにけり

福岡

あさなが捷

虫干や着ることのなきものばかり

神戸

石川叔子

郭公の全身こめて啼きぬたる

山梨

野畑小百合

脇立も秘仏も暗しご開帳

熊本

松田明子

蠮螋の戦ふ形で生まれけり

糸島

小林朱夏

帰る頃綿菓子しばむ放生会

粕屋

秋千晴

カタコンベ這うて上れば麦畑

福岡

白水良子

俊寛をこれ乗せてゆけ薪能

粕屋

吉田 葎



アマリリス女が煙草くれといふ

宇治

池田華甲

金龜子投げ捨つごとく思慕を断つ

福岡

亀井紀子

山国の鐘滔々と天の川

東京

古川夏子

悔残る青の時代や草苺

東京

山田正子

疎開先裸足で通学したことも

福岡

山田貞枝

あぢさゐの芯の暗さよ愴気かも

八尾

田岡千章

もう空を映す気はなし青田風

大阪

青木朋子

故郷の植田はいつも暮れの色

福岡

山内碧

謝れば収まることよ髪洗ふ

須恵

苑実耶

花菖蒲巡り朱塗りの膳につく

須恵

長節子

翡翠や知らぬ人より双眼鏡

東京

今井春生

からみつつ蛇吸はれゆく盤座に

大阪

堀江恵子

金魚鉢岩置き蓬莱山となす

福岡

栗原京子

亡き母の針目真直ぐ更衣

横浜

小川涼



集会所の古びるままや額の花

夏日燦、ビルともまごふ船すゝむ

月見草砂をかぶれる捨て小舟

竹が皮脱ぎたる音か雨音か

閉店の貼り紙震へ桜桃忌

良き筆に墨含ませて娑羅の朝

後継を問へば黙せり額の花

老犬に歩巾を合はす夏の海

陽炎や摺めば消える追へばまた

象つれて廻るピエロや夏休み

張り出せる枝を押しやり墓洗ふ

足長き君がまとへる花吹雪

甚平を着て入院も退院も

暫くは横に猫ゐる夕端居

福岡

大地真理

東京

清水量子

東京

遠山のり子

鳥栖

南友子

下関

乾有杏

福岡

ふじの茜

山梨

中原俊之

福岡

桜三奈子

福岡

犬丸勝子

萩

岸千手

福岡

野田美子

福岡

星原悦子

福岡

神谷耕輔

宇美

内藤玲二

# 空作品評

柴田佐知子

みなみさんの心の瑞々しさが匂いたつような新鮮な作品である。

夕立のその上にある棚田かな 小林 朱夏

目を凝らす網戸の外の世の中に 高倉 和子  
蛍かご覗く異界を見ることがく 織田 高暢

和子さんの句は「網戸」の内側から、高暢さんの句は「蛍かご」の外から目を凝らし、或いは覗く。同じ空間にいるはずなのだが、透けた網を通して見る景は異質な世界へと転換する。自分の感覚に徹して詠むとき、その景は無限の妙を見せてくることをこの二句が描き出している。

下駄履きしばかりの足に祭笛 中田みなみ

浴衣を着て祭へ出かようとしていると祭笛が聞こえてきたのである。ことに珍しい題材ではない。ところがこの句の新しさは、「下駄履きしばかりの足に」という焦点のあて方にある。浴衣の裾の素足がクローズアップされた艶な雰囲気と祭の持つうきうきとした情感が、独自の表現によって伝わってくる。

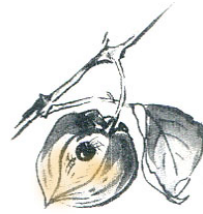
マチュピチュのようなどころではないであろうから、多分棚田も夕立の中にあつたものと思う。しかしオーバーな表現によって、積み重ねたような棚田が現れてくる。「その上にある」という虚の言い回しの面白さが句の眼目。へ螻螂の戦ふ形で生まれけりもうまい。

父さんのおどろぐ箱や麦の秋 苑 実耶

幼い子供の話言葉を俳句の枠に移したような可愛いらしさと、遙かとなった幼少時代へ遠目するような懐かしさがある。「麦の秋」がその情感を更に増幅して心地良い。  
(以下略)

# 空集

## 柴田佐知子選



六月や迷彩のこる工学部

停車場があればたばこ屋花棟

はらからのひとり欠けたる螢狩

鯉五郎引潮待てり跳ねたくて

強がりを言うても独り夏の月

道をしへ辿りつきたる尼寺は留守

ロザリオに残る閃光長崎忌

散ることに迷ひなぞなし貌佳草

人許す心の欲しやアマリリス

香水の一滴こころ鏡ひけり

夕菅や別れの紅を唇に

忘れたき事の多かり茗荷の子

霊峰の風真つ向に三尺寝

ラムネ玉地球は闇に放たれし

長靴で飛び出す子供鳳仙花

金魚玉顔が大きく歪みたる

糸田 宮井知英

くちなはの擦りゆく水の快樂かな

螢かご覗く異界を見るごとく

いかづちや五指にてかばふ赤ん坊

我が生も半ばを過ぎし夏がすみ

大花火見にもゆかずに詰将棋

薩摩弁異國語のやう盆座敷

盆の僧めつきりと髪白くなる

枇杷もいで志賀のをんなの漁休

福岡 柴田志津子

福岡 あさなが捷